

バルザックのコーヒー

—実生活、作品、神話—

松村 博史

はじめに

バルザックにとってコーヒーがきわめて重要な飲料であったことは、周知の通りである。曰く、バルザックは毎日ドロドロの濃いコーヒーを飲みながら、徹夜で『人間喜劇』を書き続けた、曰く、バルザックは最高級のコーヒーを求めてパリ中を歩き回ったなどのことが、折に触れて語られ、多くの伝記などでもこの作家を特徴づけるエピソードとして紹介されている。ただそれ以上のこととなると、私たちは何を知っているだろうか。そもそも今挙げたような一般に知られたバルザックとコーヒーの切っても切れない関係というイメージは、どのような資料に基づいて語られているのだろうか。

筆者は2014年春にフランスに行ったときに、パリのメゾン・ド・バルザックの図書館に赴き、「バルザックとコーヒー」のテーマについての先行研究を調べてきた。その結果は、ある程度予想はしていたことだが、ほぼ皆無であった。図書館員の方にも手伝ってもらって探したが、やはりこのテーマでの論文は見つからない。「バルザックとコーヒー」というテーマは調べるに値しないのか、あるいはそのようなテーマは今どき流行らないのだろうか。そのことについても改めて考えてみたい。

今回の論考ではサブタイトルを「実生活、作品、神話」としている。バルザックとコーヒーのテーマについて、書簡集やハンスカ夫人への手紙から読み取ることのできる事実、そして『人間喜劇』やその他の作品において、バルザックはコーヒーをどのように書いているか、さらにはバルザックとコーヒーの関わりについて、人口に膾炙している内容という三つに分けて考察していくことにしたい。ただし順番としては最初に「神話」、続いて「実生活」、最後に「作品」というように扱うことになるだろう。

1. バルザックとコーヒーの神話

バルザックとコーヒーの結びつきについては、バルザックの研究者でなくても、あるいはバルザックの小説をほとんど読んだことがないような人でさえも、偉大な人物についての親しみやすいエピソードとして聞いたことがあるだろう。小説家バルザックが、毎日コーヒーを何杯も飲みながら、『人間喜劇』という記念碑的な作品を書き上げたという話は、人口に膾炙して、ほとんどこの作家についてのステレオタイプ的な見方にさえなっている。まずはこの「神話」について取り上げていくことにしよう。

ここでバルザックとコーヒーに関する神話として挙げたいのは、例えば次のような言説である。最初の引用は『ル・モンド』発行の雑誌、次の引用はあるロシアの通信社の記事として掲載されていたものだ。

バルザックが最も好調なのは、コーヒーを扱うときである。それも当然、彼は徹夜で労働するときに、コーヒーを大海のように飲んでいたのである。それに続いて彼は適切な方法で作られたときにこの飲み物がもたらす至福の状態を描き出す¹⁾。

オノレ・ド・バルザックは文章を書き始める前に必ず5杯から7杯のコーヒーを飲んでいて、彼は一生の間におよそ5万杯のコーヒーを飲んだことが確かめられている²⁾。

ここにある「5万杯」をどう算出したのかはなはだ疑問であるが、バルザックが30年間コーヒーを飲み続けたとして、一日5杯で計算すると54,750杯になる。恐らくはそういう数値だろう。筆者が書簡集で確かめたところでは、だいたい1日に3、4杯と書かれていたはずなのだが。

このような記述はある意味、ステレオタイプと呼べるものであり、これを書くにあたって執筆者たちがいちいち原典にまでさかのぼったかは疑わしい。だがこうしたクリシェもまた、一般の人々が抱いている作家バルザックのイメージに大いに寄与しているはずである。だからこのような記述を「神話」と呼んでおいても差し支えないであろう。

それではこうしたステレオタイプそのものは、どのようにして形成されてきたのであろうか。バルザックがコーヒーについて述べている文章で、よく引き合いに出されるのが『近代興奮剤考』*Traité des excitants modernes* (1839)である。その内容についてはあとで詳しく触れるが、バルザックがコーヒーについての論考として書いている内容が、いくつかの引用においてあたかもバルザック自身の経験であるかのように書かれていることも確認できた。こうした著作と作家の実経験の間の意識的あるいは無意識的な混同も、「神話」の形成には大いに寄与していることが見て取れる。

ここでは、その他にバルザックとコーヒーに関する神話を形作るのに貢献している有名な引用をいくつか挙げておくことにする。まずはとてもグルメなバルザックがコーヒー豆に非常にこだ

わっていたことを示すエピソードである。彼はお気に入りの3種類のコーヒー豆を買うために、パリ中を歩き回っていた。この話を有名にしたのは、レオン・ゴズランの『スリッパ姿のバルザック』*Balzac en pantoufles* (1856) である。

夕食のあと、われわれはいつもテラスに移動してコーヒーを飲んだ。バルザックのコーヒーは伝説として残るに値しそうなものだった。有名なヴォルテールのコーヒーでさえその榮譽に比肩し得るとは思われない。[...] このカフェはブルボン、マルティニック、モカの三種の豆から成っており、ブルボンを彼はショッセ＝ダンタンのモン＝ブラン通りで、マルティニックはヴィエイユ＝オードリエット通りで、モカはサン＝ジェルマン界隈の大学通りの食料品店で買っていた。私は一度か二度、美味しいコーヒーを求めるバルザックの旅路に付き合っただことがあるが、どの店とは今となっては言うことができない。それはパリ中を巡る、少なくとも半日はかかる買い物であった³⁾。

この引用を見ると、同時代の人々の目から見ても、バルザックのコーヒー好きがすでに伝説的と言えるものであったことがわかる。当時出版されたコーヒーに関する文献、ルイ・クレールという医者による『コーヒー愛好家必携』*Manuel de l'amateur de café* (1828)⁴⁾によると、コーヒーの豆はこれら3種類に加えてサン＝ドミンゴ、グアドループ、カイエンヌが挙げられており、中でもモカが最も高価であったようである。またこの本には当時のコーヒー店がリストとして挙げられているが、バルザックが買っていた店は残念ながら特定できなかった。

また一時期バルザックの作品を出版していたエドモン・ヴェルデによる回想録(『バルザックの私的肖像』*Portrait intime de Balzac* (1859))においても、レオン・ゴズランの語った内容としながら、次のような引用が見出される。上のゴズランの引用と重なる部分があるのでそれは省略する。

8時頃にコーヒーを飲み終わると、彼は寝室に上がり、好むと好まないとにかかわらず、無理に夜中まで自然に反した眠りを取るものであった。夜中の12時になると使用人が彼を起こしに来て、彼は再び激しい労働についた。それは彼を早死にさせた終わりのない労働であった⁵⁾。

バルザックの作品や書簡を引用した伝記作家たちによる解説、そしてこうした同時代の人々の証言が繰り返し引用された結果、コーヒーを飲んで徹夜するバルザック、コーヒー通の作家バルザックという神話が次第に出来上がってきたものと考えられる。そして神話は一度完成すると、なかなかそれ以上に追求しようという人は少なくなるものであり、相互参照の循環が繰り返されていくことになるだろう。では、そのもととなる事実とはどのようなものだったのか、次にそれを見ていくことにしたい。

2. 日常におけるバルザックのコーヒー

バルザックが日常においてコーヒーとどのように付き合っていたかを知るのには、伝記作家たちによる記述や、作家と親しく付き合っていた人たちの証言も参考になるものの、やはり書簡集とハンスカ夫人への手紙を調べ、彼自身が普段の執筆活動について書いている中でどのようにコーヒーについて触れているかを見ることが必要不可欠となるだろう。ここでは霧生和夫氏が作成されたバルザック全集のコンコルダンス⁶⁾を大いに活用しつつ調査を進め、そこから取り出すことのできた結果のいくつかを紹介することとしたい。

バルザックのコーヒーとの付き合い方は、おもに書簡の引用を通して知ることができるということは、バルザックの研究家なら誰でも伝記などを読んで知っていることであろう。ただ筆者自身は書簡集やハンスカ夫人への手紙をこのテーマに添って丹念に見たことはこれまでなかったが、コーヒーへの言及が書簡に大量に存在することが改めて確認できた。コンコルダンスによれば café という語は書簡集では 38 例、ハンスカ夫人への手紙では 130 例ほど見出されるのである。その中のめばしい例をつぶさに調べてみたところ、いくつかのことがわかった。もちろん café という言葉には、飲み物としての「コーヒー」と、いわゆる「カフェ」すなわちコーヒーなどを消費する場所という両方の意味がある。それについてはこのあと、バルザックの作品と比較しながら見ていくと興味深い事実が判明するのだが、ここではもちろん「コーヒー」の意味で使われている例を中心として見ていくことにする。

ここまで何度か触れてきたように、どのバルザックの伝記においても、コーヒーのエピソードは多かれ少なかれ扱われているようである。しかしそれらはいわば「相互参照」となっており、前の項で見たように半ば「神話」のようなものになっている。それらを読んでいると、例えばバルザックは若い頃、コーヒーを飲んでばかり仕事をしたが、晩年にはコーヒーも全然効き目がなくなり、それどころか体を害するようになっていった、というようなイメージも抱いてしまいそうになる。しかし実際に書簡集の記述に当たってみると、興味深い事実が浮かび上がってくるのである。例えば次のハンスカ夫人への手紙からの二つの引用を比較してみることにしよう。

ではさようなら。数日中にはもっと楽しいことをお伝えできるかも知れません。しかしそれも疑わしいことです。私の健康状態は極端に悪く、コーヒーも何の精神の力ももたらしてくれません。(1836 年 3 月 24 日)⁷⁾

すべてが煩わしいです。何もできません。食事は十分にとっていますがやせてきています。コーヒーは私の脳に何の効果も生み出しません。毎晩軽い熱の発作があり、気分が悪いのですが、医者に伝えられるような病気の原因も見当たりません。(1847 年 6 月 28 日 *L.H.*, t. II, p. 602)

この二つの引用は一見したところよく似ている。両方とも健康状態の悪さを訴え、コーヒーが何の効果ももたらさないことを嘆いているのだが、実は最初の手紙は1836年に、そしてあの方が1847年に書かれたもので、二つの手紙の間には10年以上の開きがある。しかもこれと同じようなことが書いてある手紙は、バルザックの生涯にわたって何十と見つかるのである。早いものでは1832年の母親への手紙で「コーヒーのおかげで胃が痛みます」⁸⁾と嘆き、1833年には友人の女性であるズルマ・カローへの手紙で「徹夜とコーヒーのおかげで私は死んでしまいそうです」(*Corr.*, t. II, p. 216)と書いている。これらは1829年の『最後のふくろう党』と『結婚の生理学』によるバルザックの本格的デビューと、彼の名声を確立した1835年の『ゴリオ爺さん』の間の時期にあたり、当時のバルザックはまだ若く売り出し中の作家であった。

書簡集の中でバルザックが最初にコーヒーに触れているのは、1819年の妹への手紙においてである。二十歳のバルザックは、文学修行時代のレディギエール通りの屋根裏部屋で、自分の悲劇作品のアイデアをコーヒーの出がらしに喩えている。

それに僕は『クロムウェル』の計画が成功することを一抹の興味をもって望んでいるんだ。僕は自分の哀れな悲劇をコーヒーの出がらしのように思っている。つまり、僕が独立するためにそこから何を引き出せるかを計算しているわけなんだ。(1819年9月 *Corr.*, t. I, p. 42)

また彼は同じ年の別の手紙で、暖炉にコーヒーが散乱していることに心を痛め、日常生活の営みとして洗濯などと並んでコーヒーを作ることを挙げていたりする(1819年10月 *Corr.*, t. I, p. 52)。

バルザックの書簡の中で、日常的に飲用しているコーヒーについての言及は恐らく百近くあるのだが、中でも多いのは、やはりコーヒーが彼を残酷に痛めつけ、彼の健康に害を及ぼしていると嘆く手紙である。それについては先の引用で見た通りだが、次の一節からはそれでも彼がコーヒーの必要性を感じていることがうかがえる。

私は昼夜を分たず仕事し、コーヒーだけを飲んで生きています。(1831年5月18日 *Corr.*, t. I, p. 530)

私が途方もない量のコーヒーを飲んでいて、あの恐ろしい胃の痛みが再び襲ってきました。しかしコーヒーなしに仕事することはできません。(1843年1月23日 *L.H.*, t. I, p. 640)

また次の引用ではバルザックはやや哲学的になっている。調子のいいときにはコーヒーが彼の精神に宿る「内的人間」を呼び出す働きをするようである。

私は深い悲しみに沈んでいます。コーヒーは私に何の作用ももたらさず、内的人間も肉と骨

の牢獄に閉じ込められたままで現れてきません。[...] 脳が動きません。私は水で薄めたコーヒーを2杯飲みましたが、まるで水を飲んでいるようなものです。(1837年11月7日 *L.H.*, t. I, p. 424)

このような中であって、バルザックもただ同じように飲み続けていただけではなく、時には紅茶、ショコラ、水キセルなど他の嗜好物と組み合わせたり、コーヒーの作り方も工夫していたようである。例えば次のハンスカ夫人への手紙では、コーヒーを冷たい水で淹れるという大発見をしたと報告している。今で言うダッチコーヒーのようなものであろうか。

あなたに報告したい極端にすばらしい衛生上のニュースがあります。というのも私が冷たい水でコーヒーを作ることを思いついて以来、もはや胃の痛みもなく、コーヒーが私を苦しめることもなくなりました。冷たい水で作ったコーヒーは沸騰した水で作ったコーヒーとは全く別物です！ 体に害を及ぼすことなく精神的な効果だけが得られるのです。(1847年7月27日 *L.H.*, t. II, p. 643)

バルザック自身、すでに1839年の『近代興奮剤考』の中で、冷たい水で淹れたコーヒーの方が、沸騰した水で煎じたコーヒーよりも良い効果をもたらす⁹⁾と書いているのだが、そのことはどうやらすっかり忘れているらしい。

実はバルザックの生きた19世紀前半は、新しいコーヒーの飲み方がさまざまに工夫された時代でもあった。この時代だけで、ドリップ式、エスプレッソ式、サイフォン式が開発されている¹⁰⁾。とりわけドゥ・ペロワによって発明されたドリップ方式は画期的で、ブリヤ＝サヴァランが有名な『味覚の生理学』の中で最良の方法として賞讃している¹¹⁾。ほか、バルザックも『近代興奮剤考』などでこの方法を当時の最も進んだ方法として取り上げている¹²⁾。このドゥ・ペロワ式のコーヒーポットについては、あとでバルザック作品を分析するときに詳しく触れるつもりである。また当時コーヒーについて書かれた文献もいくつかあり、すでに挙げたL. クレールの『コーヒー愛好家必携』(1828)の他に、G.-E. クーパール＝ドルネの『コーヒーのモノグラフ』(1832)¹³⁾などがその例として挙げられるだろう。それらの書物にはコーヒーの歴史から、豆による味の違い、コーヒーのさまざまな淹れ方の比較などが詳しく書かれている。このようにコーヒーの作り方がいろいろと工夫されるのは、この新しく洗練された飲み物が、都会のカフェだけではなく個人の家庭でも広く楽しまれるようになってきたことを表しているのだろう。

バルザックがコーヒーについて最後に言及しているのは、1849年12月に母に宛てた手紙においてである。彼はこの頃、ウクライナにあるハンスカ夫人の領地に滞在していたが、体調はよくなく、病気に苦しんでいた。医者からコーヒーを禁じられ、非常に薄めたコーヒーを飲んでいたようである。

来年にはパリで家財道具を片付けてからここに帰り、病気が完全に治るまで6ヵ月は滞在し

ようと考えています。一見したところはパリを出発した頃よりもよくなっているように見えますが、少しでも動く息切れして仕事も全くできなくなるし、コーヒーも禁じられています。(1849年11月29日 *Corr.*, t. V, p. 682)

この頃のバルザックはパリで『従兄ポンス』など最後のいくつかの作品を新聞に連載していたが、ウクライナではたびたび心臓の発作に襲われていた。彼は翌年パリに戻ると数ヵ月で亡くなってしまうのである。

書簡に表れたコーヒーに関する記述を見ていると、バルザックは若い頃から晩年まで、妹のロール、母親、ダブランテス夫人、ズエルマ・カローなど最も親しい人々にコーヒーの話を書き送っていることがわかる。そしてもちろん最も多くコーヒーに言及しているのはハンスカ夫人への手紙においてである。記述の内容は1830年頃からずっと変わらず、自分がいかにコーヒーを飲みながら仕事を続け、そのため苦しんでいるかを絶えず書きつづっている。コーヒーはやはり生涯、バルザックとともにあった。彼は仕事をしている限り、コーヒーを飲み続けていた。これはバルザックの神話にある通りだが、家族やハンスカ夫人に宛てた手紙を通して、その実際の様子が確認できるのである。

3. バルザック作品におけるコーヒー

それでは最後に、バルザックの作品や、彼が出版したテキストの中で、コーヒーがどのように扱われているかを見ていくことにしよう。これについてもコンコルダンスで調べてみたところ、『人間喜劇』における *café* という単語の登場回数は、400件を少し超えるくらいであった。しかしこれはある程度予想通りだったのだが、『人間喜劇』において *café* という単語はかなり多くの場合、むしろコーヒーを飲む場所としてのカフェの意味で使われている。これは『書簡集』や『ハンスカ夫人への手紙』における *café* が飲み物としてのコーヒーの意味で使われることが多いのとは対照的であり、非常に興味深い事実だ。筆者に思い当たる範囲でも、バルザックの小説でコーヒーが何か重要な役割を果たしたり、あるいは主要な登場人物がコーヒーで毎晩徹夜しているなどという話はあまり出てこない。

バルザックのテキストで「コーヒー」を扱っているものと言え、何よりも先に『近代興奮剤考』*Traité des excitants modernes* (1839)を挙げなくてはならない。ここではまず『分析的研究』*Études analytiques*に分類されるこのエッセイにおいてバルザックがコーヒーについて語っているところを取り上げ、そのあとで『人間喜劇』の小説作品でコーヒーがどのように扱われているかを考察することとしたい。

まず『近代興奮剤考』を取り上げる。『社会生活の病理学』*Pathologie de la vie sociale*の一部を構成するこのテキスト¹⁴⁾では、「コーヒーについて」Du *café* という一節が設けられ、そこでバルザックは数ページにわたって、コーヒーの効用やさまざまなコーヒーの淹れ方について書い

ている。一方、バルザックはすでに1832年の『パリからジャワへの旅』*Voyage de Paris à Java* というテキストの中で、「刺激剤」*stimulant* の一つとしてコーヒーを挙げていた。

ワイン、コーヒー、紅茶、阿片は四大刺激剤であり、その作用は胃に与えられた衝撃から瞬時に脳の力に反応を引き起こす。さらには魂の非物質性までも甚だしく損なってしまうのである¹⁵⁾。

しかしこのテキストでは、東洋のイメージに包まれた、やや異国情緒的な文脈にコーヒーが位置づけられていたのに比べ、1839年の『近代興奮剤考』では、コーヒーの効果を化学的かつ生理学的に説明するにとどまらず、いかにその効果を極限まで引き出すかを追求する姿勢が見られる。とりわけ次の引用でそのことがよく理解できるだろう。

最後に私は恐ろしくしかも残酷なコーヒーの作り方を発見したが、このやり方は極度に頑強な人間にしかお勧めしない。[...] それは挽いてすりつぶしたコーヒー豆を冷たい状態で無水処理（これは化学の用語で水をほとんどあるいは全く用いないという意味である）し、空腹状態でこれを飲用するというものである。（*Traité des excitants modernes*, Pl., t. XII, pp. 317-318）

コーヒーの効果を極限まで引き出そうとするこの姿勢は、バルザックの書簡からうかがえる作家のコーヒーとの付き合い方に近づくものであると言えるだろう。こうしてコーヒーの力を最大限まで引き出した結果、次の引用に見られるような興奮状態が現出するのである。

その途端、全てが動き出す。アイディアが戦場におけるナポレオンの軍隊のように行軍を開始する。まさに戦闘が行われるのだ。追憶が軍旗を広げて攻撃の構えを見せて前進する。比喩の軽騎兵は見事な疾走で展開する。[...] 紙はインクで覆われていく。というのも戦場が黒い火薬の粉で覆われるように、徹夜はその始まりと終わりに黒い水の激流にまみれるものだからである。（*Ibid.*, p. 318）

この引用が戦場と軍隊の比喩で書かれているのは、これまでも多くの研究者が指摘している通りである。コーヒーという黒い水を飲むことから始まり、夜が明ける頃には紙が黒いインクの文字で埋まっていく。ここではコーヒーが当然のように「執筆」というただ一つの行為に結びつけられている。もちろん、こうしたテキストを「伝記」に直結することには慎重でなくてはならないが¹⁶⁾、バルザックがこのテキストで自らの徹夜の経験を題材に一つの文学的創造を成し遂げていると考えることは十分に可能であろう。彼は書簡、とくにハンスカ夫人への手紙では、コーヒーが体に及ぼす害のことを多く書いているのだが、コーヒーが絶大な効果を発揮して執筆が捗っている様子は、むしろこちらのテキストの方に生き生きと描かれていることがわかる。

それでは次に、『人間喜劇』の小説の中でコーヒーが取り上げられている場面のいくつかを見ていくことにしよう。この項目の最初に書いたところだが、バルザックとコーヒーとの結びつきから考えると、彼の小説の中でコーヒーが重要な役割を果たすような場面は意外なほど少ない。その中でもコーヒーが小説の中で扱われている例を探してみると、例えば『マッシミラ・ドーニ』の中で、若き貴族のエミリオ・メンミが美しいマッシミラへの果たせぬ恋に絶望して、毎日ヴェネツィアのサン＝マルコ広場にあるカフェのフロリアンでコーヒーを飲み続けて自殺を図ろうとする一節がある。これは『近代興奮剂考』に見られるような、コーヒーの言うなればドラッグとしての面を強調した用法とすることができるだろう。

最後に、エミリオが毎日カフェ・フロリアンで飲むブラックコーヒーのお金を払わなくてはならなかった。彼はそのコーヒーで夕方まで神経を興奮状態に保ち、それを過度に続けることで死のうと考えていたのだ。(Massimilla Doni, *PL*, t. X, p. 551)

そしてまた、バルザックが自分のコーヒーへの凝りようを何人かの登場人物に反映させているような場面がある。例えば『ユルシュル・ミルエ』では、主人公ユルシュルの保護者であるミノレ医師が客人のボングラン判事に自慢のコーヒーを出している次のような場面が見られる。

ミノレ医師はボングラン判事に一杯のコーヒーをふるまった。それはモカにブルボンとマルティニックをブレンドしたもので、医師自らが焙煎し、豆を挽き、銀製のシャプタル式と呼ばれるコーヒーポットで作ったものであった。これは医師にすれば大いなる親しみの表現だった。(Ursule Mirouët, *PL*, t. III, p. 850)

ここではもちろん、最初の方に挙げたレオン・ゴズランの引用が思い出されるだろう。モカ、ブルボン、マルティニックをブレンドしたコーヒーはバルザック自身がこの上なく好んだ最高級の組み合わせであった。

ここでのもう一つの重要な要素は「シャプタル式と呼ばれるコーヒーポット」である。これが実はどのようなものか不明で、これまで多くのバルザック研究者を悩ませてきた。ビブリオフィル版バルザック全集のデュクルノーの注¹⁷⁾によれば、これは Chaftal の誤りで、北フランスで広く使われていた二つの部分をはめ込んで使うコーヒーポットを指すそうであるが、その情報の出所ははっきりしない。一方、シャプタル (Jean Chaptal, 1756-1832) というのは、18世紀から19世紀前半にかけて活躍し、バルザック自身も『絶対の探求』などのテキストで挙げている化学者の名前である。コーヒーの器具というのは多かれ少なかれ、どれも化学の実験道具に似たものだが、最新式のコーヒーの淹れ方を際立たせるために有名な化学者の名前を冠したのではないだろうか。

このシャプタル式のコーヒーポットは、『ウジェニー・グランデ』にも「再登場」する。パリから地方都市ソミュールのグランデ家にやってきたウジェニーのいとこシャルルが、最新式の

コーヒーの作り方をウジェニーと給仕のナノンに説明する場面である。

「ああ、大切なおばさま！ 私がここに立ち寄ったということの、少なくとも一つのよい証しを残すことにしましょう。あなたがたはまったく時代遅れでいらっしやいます！ シャプタル式のコーヒーポットを使って美味しいコーヒーを淹れるコツをお教えしましょう」と、シャルルはシャプタル式コーヒーポットの仕組みを説明しようとした。(Eugénie Grandet, *PL*, t. III, p. 1089)

これに対し、それまでグランデ家で飲んでいたコーヒーは、「煮出しコーヒー」とナノンが呼ぶところのものであった。それが上の引用の直前で描写されている。

「これはいったい何なんですか？」とシャルルが笑いながら尋ねた。彼が指差したのは縦長のポットで、釉薬をかけた茶色の陶器でできたものだった。内側は光沢があり、灰を散らしたような縁取りがしてある。コーヒーは沸騰した液体の表面に浮かび上がってから、やがてこのポットの底に沈むのであった。(Ibid.)

シャルルから「時代遅れ」と決めつけられたコーヒーポットだが、これは確かに 19 世紀より前の「煮出し式」のコーヒーの作り方である。一方シャルルがここで説明している「シャプタル式」については、前に書いたように詳細は不明で、実は『ユルシュル・ミルエ』でも、『ウジェニー・グランデ』でも具体的にどのようなものかは示されないのであるが、デュクルノーの注でも「二つの部分をはめ込んで使うコーヒーポット」とあることから考えると、本質的には今日のドリッブ式の原型である「ドゥ・ペロワ式」と変わらないものではないか。

それではバルザックが『近代興奮剤考』の中で「不滅の」という形容詞を冠している「ドゥ・ペロワ式」とはどういうものであったのか。これを同時代に広く流布していた『会話・読書辞典』から取り上げてみることにしよう。

便利さという点では、ドゥペロワ式コーヒーポットにまさるものをわれわれは知らない。[…] ドゥペロワ式コーヒーポットは上下に重ねた二つの部分から成る。上の部分の底にはたくさんのごく小さな穴をあけた円盤が取り付けられており、その全体がフィルターを形成している。このフィルターの上に粉にしたコーヒーを入れるのである。[…] このフィルターを取り付けた上の部分はもう一つの部分、すなわち受け壺にはめ込むようになっている。フィルターを通った透明な液体はこの受け壺に落ちる仕組みになっているのである¹⁸⁾。

連続して引用してみると、シャルルが得意げに新しいコーヒーの淹れ方を説明する仕方も、このようなものではなかったかと思われてくる。

実際に『ウジェニー・グランデ』はバルザックの作品の中でも、飲み物としての café の登場

回数が比較的多い作品である。しかもそれが作品中で少なからず重要な役割を果たしている。この小説の中心となるテーマの一つは、時代の流れに取り残された地方都市ソミュールの停滞性であり、それはこの都市の名称が「塩漬けに使う塩水」を意味するフランス語 (saumure) と音が似通っていることからわかる。吝嗇で知られるグランデ親父と娘のウジェニーもそのような停滞の中に暮らしていたのだが、パリからやって来たダンディーないこのシャルルに恋することで、ウジェニーの中に変化の兆しが現れてくる。その変化を象徴するのが「コーヒー」なのである。

次の引用は、厳しい父親の監視の目をくぐりながら、ウジェニーが給仕のナノンに協力を求めてシャルルにコーヒーを飲ませようとする場面である。小説の設定である 1819 年頃には、地方都市ではコーヒーはまだパリで飲まれるエキゾチックで都会的な飲み物というイメージを保っていたのだろう。ここでは明らかにコーヒーがパリの都会生活を喚起する要素となっている。

「ナノン、昼食のためのクリームはちゃんと用意してあるの?」「ええ、昼食用ですか、ありますとも!」と年取った給仕女が言った。「それじゃ、シャルルさんには濃いコーヒーをお出しするのよ。デ・グラッサンさんから聞いたところでは、パリではコーヒーはすごく濃いそうだから。たくさん入れてちょうだい」「そんなコーヒーがどこにあるんですか?」「そんなの、買えばいいじゃないの」(Ibid., p. 1085)

この引用の前後では、ウジェニーとナノンがコーヒーに使うクリームと、当時まだ高価なものであった砂糖を苦勞して準備している様子が面白おかしく描かれている。そしてシャルルからシャブタル式のコーヒーポットの仕組みを聞いたあとでは、ウジェニーは自分でコーヒーを作ってもいいと言い出すのである。

「あらあら、そんなにたくさんのことを覚えなくてはいけないんだったら、一生かかってしまいますよ。私はそんなコーヒーの作り方はまっぴらですね[…]'とナノンが言う。するとウジェニーは「コーヒーは私が作るわ」と言った。(Ibid., p. 1089)

この一節は、ウジェニーの変化への意志を表していると言えるだろう。バルザックによれば、コーヒーは刺激剤であり、興奮剤であった。『ウジェニー・グランデ』のなかで、パリからやってきたシャルルはまさにグランデ家にとっての一種の興奮剤のような役割を果たし、グランデ家に革命をもたらすかも知れない存在であった。現にウジェニーは、シャルルが東インド諸島に出發するに際してそれまで貯めていた金貨を全て渡してしまい、父に初めて反抗の意志を示して大きな衝突を起こすことになる。しかし結婚の約束まで交わしたシャルルは彼女のもとに戻ることはなく、ウジェニーは失意のうちに父の財産を相続し、停滞の生活へと戻っていく。コーヒーはついに彼女の人生を変えることはなかったのである。

上で述べたように、バルザックの『人間喜劇』を構成する小説の中で、飲み物としてのコーヒーが彼の実生活におけるほど効力を発揮する作品はほとんど見当たらないのだが、『ウジェニー・

グランデ』は逆説的にコーヒーを利用した小説だと言うことができるだろう。すなわちここでは興奮剤としてのコーヒーが、かえって地方生活における刺激の欠如あるいは停滞性を浮かび上がらせ、そのことをより強調するために用いられているのである。

おわりに——コーヒーと近代作家の姿

ここまで見てきた内容から、いくつか言えることをまとめてみよう。まずコーヒーはつねにバルザックとともにあった。彼は周りの親しい人々、とりわけハンスカ夫人への手紙でしばしばコーヒーについて触れ、そこでは日常的にコーヒーを飲んでいることだけではなく、コーヒーが日々彼の体を痛めつけていることも告白していた。しかもそれを何十年にわたって何度も繰り返して書きつづっていたのである。しかしそれほど身近であったコーヒーについて、彼は小説ではほとんど書かなかった。『近代興奮剤考』にはコーヒーの話が詳しく書かれているが、これはどちらかと言えばエッセイに近いものである。このように、書簡などに表れたバルザックとコーヒーの付き合い方と、小説作品における取り上げ方の間には明確な対照が認められるが、その違いはどこに由来するのだろうか。

バルザックの小説の中で、パリにあるカフェ・ド・パリ、カフェ・ド・ラ・ペ、ヴェネツィアのカフェ・フロリアンなど、コーヒーを飲む場所としてのカフェは、しばしば重要な働きをしている。バルザックはカフェを近代社会を象徴する重要な要素として小説に取り入れた。一方バルザックが飲み物としてのコーヒーをあまり小説に書かなかったのは、意識的なのか、無意識的なかわからないが、少なくともそれがバルザック小説の範疇に収まりにくかったからだと言うことができそうである。

しかしコーヒーを何杯も飲みながら徹夜し、執筆作業という孤独な戦いを自らに強いる作家という存在は、まさに近代的だということができるのではないだろうか。そのことはバルザック自身も強く意識していたはずである。その意味で、彼が1832年の『パリからジャワへの旅』においてはコーヒーをただ「刺激剤」stimulantsとしていたものを、1839年には「近代興奮剤」excitants modernesと改めているのはまことに象徴的である。また『近代興奮剤考』の発表前には、バルザックがこのテキストについて『近代的悪習の生理学』*Physiologie des excès modernes* というタイトルも構想していた¹⁹⁾という事実もあるが、そのことも作家の考えがどこにあったかを理解させてくれる。コーヒーを援軍として孤独な戦いを続ける近代人としての作家の姿が小説に描かれることはなかったが、バルザック自身は、その点で、彼が創り出したどの登場人物よりも時代を先んじていたのかも知れないのである。

注

- 1) François Bott, « Balzac, payer de sa personne... », *Le Monde*, Dossiers et documents littéraires, hors-série n° 2, novembre 1993.
- 2) « Petites extravagances des grandes génies de notre monde », *RIA Novisti*, Opinions, 29 septembre 2006.
- 3) Léon Gozlan, *Balzac en pantoufles*, (1856 ; 2^e éd. 1865), Maisonneuve et Larose, rééd., 2001, pp. 27-28.
- 4) Louis Clerc, *Manuel de l'amateur de café, ou l'art de cultiver le cafi, de le multiplier, etc.*, chez l'éditeur, 1828.
- 5) Edmond Werdet, *Portrait intime de Balzac : sa vie, son humeur et son caractère*, Dentu, 1859, p. 349.
- 6) 埼玉大学名誉教授の霧生和夫氏が構築されたバルザックのコンコルダンスは、現在ではパリのバルザック博物館 Maison de Balzac のホームページから、Vocabulaire de Balzac として容易に参照することができる。筆者もこの HP を利用させていただいた。
- 7) *Lettres à Madame Hanska*, édition établie par R. Pierrot, Robert Laffont, coll. « Bouquins », 1990, t. I, p. 303. これ以降、『ハンスカ夫人への手紙』からの引用は、*L.H.* の略号と巻番号・ページ番号によって示す。
- 8) *Correspondance*, textes réunis, classés et annotés par R. Pierrot, Classiques Garnier, 1960-69, t. II, p. 135. これ以降、バルザックの『書簡集』からの引用は、*Corr.* の略号と巻番号・ページ番号によって示す。
- 9) *Traité des excitants modernes*, dans *La Comédie humaine*, édition publiée sous la direction de P.-G. Castex, Gallimard, Bibliothèque de la Pléiade, 1976-1981, t. XII, p. 317. これ以降、『人間喜劇』に含まれる作品についてはすべてこのプレイヤード版を参照することとし、引用は *Pl.* の略号とタイトルと巻番号・ページ番号で示す。
- 10) ドリップ方式は 1800 年頃にドゥ・ペロワが改良したフランス式のポットが広く使われるようになった。1819 年にはエスプレッソ方式の原型となるポンプ式パーコレーターがフランスで特許を受けている。またサイフォン式は 1825 年に原型となる器具が開発されたという。Cf. W. H. Ukers, *All about Coffee*, Library of Alexandria, 2012 ; UCC コーヒー HP「コーヒーの歴史」(<https://www.ucc.co.jp/enjoy/knowledge/history/>) ; 伊藤博『コーヒー博物誌』、八坂書房、1993、pp. 45-48.
- 11) Brillat-Savarin, *Physiologie du goût* (1826), texte présenté par J.-F. Revel, Flammarion, 1982, p. 113.
- 12) *Traité des excitants modernes*, *op. cit.*, p. 317.
- 13) G.-E. Coubard d'Aulnay, *Monographie du café ou Manuel de l'amateur de café*, Paris, Delaunay, 1832.
- 14) 『近代興奮剂考』は、『人間喜劇』全体の中では『分析的研究』に含まれ、『優雅な生活論』*Traité de la vie élégante*、『歩き方の理論』*Théorie de la démarche* とともに『社会生活の病理学』を構成する一篇である。邦訳には山田登世子訳・解説『バルザック 風俗研究』、藤原書店、1992 がある。
- 15) *Voyage de Paris à Java* (1832), dans *Œuvres diverses*, t. II, p. 1153.

- 16) この論文の最初に挙げた『ル・モンド』の引用に続く部分には、上記の『近代興奮剤考』からの一節が引用されている。こうした伝記作者たちの書き方が、バルザックとコーヒーに関する「神話」の形成に一役買っていることは間違いないところであろう。
- 17) *Œuvres complètes de M. de Balzac*, Les Bibliophiles de l'Originale, t. 25, 1973, p. 528.
- 18) *Dictionnaire de la conversation et de la lecture*, Belin-Mandar, t. 9, 1833, l'article « cafetière », pp. 428-429. バルザックの『近代興奮剤考』の表記は de Belloy だが、この辞書では Debelloy となっている。
- 19) 『近代興奮剤考』は当初、ブリヤ＝サヴァラン『味覚の生理学』新版のための前書きとして構想され、最初にバルザックが考えたタイトルは『タバコ学』*Tabacologie* であった。それがやがて『近代的悪習の生理学』となり、1839年春には最終的なタイトル『近代興奮剤考』に落ち着いたという。Cf. « Histoire du texte » du *Traité des excitants modernes*, *Pl.*, t. XII, p. 979.

* 本論でも触れたバルザックのコンコルダンスを構築された霧生和夫氏は、惜しまれつつも今年（2015年）の5月に亡くなられた。このコンコルダンスだけではなく、バルザック研究に偉大な業績を残された霧生先生に、この場を借りて心より追悼の意を表明したい。